

学校再生は「自治」の復権から

— 大阪・桜宮高校の体罰問題から考える



池田知隆

いけだ・ともたか 1949年生まれ。早稲田大学政経学部卒。毎日新聞社で社会部、学芸部の編集委員、論説委員を務め、退職。元大阪市の教育委員長。現在、関西大学、同志社女子大非常勤講師。著書に「ほんの昨日のこと―余録抄 2001～2009」「団塊の（青い鳥）」「日本人の死に方・考」など。

「もうわけわからないです」。大阪市立桜宮高校バスケットボール部主将の男子生徒（17歳）がそう言い残し、

自宅で自殺した。2012年12月23日。部顧問（当時47歳）＝懲戒免職＝による体罰を受けた翌日のことだった。

どうして生徒は死に追いつめられていったのか。その死をめぐる橋下徹・大阪市長の鮮やかな対応もあって、この体罰問題は大きな波紋を広げ、女子柔道界における体罰も表面化させ、日本のスポーツ界全体に激震を与えた。なぜいまもお体罰が繰り返されているのか。そのことによって子どもたちは自主性、自治意識の芽を摘まれているのではないか。日本の教育の根幹にかかわる病

巣が露呈され、教師や大人たちには、体罰に甘い教育風土を変えていく責任が問われている。

■体罰による懲戒免職

体罰は、運動部の指導上で「禁じ手」である。そのことは長年にわたって「自明の理」とされてきた。それがどうしていまなお根強く残っているのか。まずは、桜宮高校の問題に関する大阪市外部監査チームの報告書からそのあらましをたどってみよう。



自殺したA君は昨年9月、主将になって以降、K顧問から叱られることが増えた。11月以降は「キャプテン辞める」などと主将交代を促されたが、A君は主将を継続すると訴えた。

12月18日の女子大学チームとの練習試合ではA君がボールを奪われるなどしたため、K顧問は「なんで女に負けるねん」との気持ちでA君の顔を数回たたいた。部員たちが書くノートに、A君はいつも詳細に指導内容を記していたが、この日は「もうわけわからないです」としか書いていなかった。

「学校に行きたくない」。19日朝、A君の言葉を聞いた母親は同日の練習試合を観戦し、生徒が元顧問から「キャプテンを辞めろ」と怒鳴られているのを目撃した。帰宅後も「先生の考えていることが分からない」と漏らしたA君。兄に勧められてK顧問宛に書いた「私が今思っていること」と題する手紙には次のようにある。

「先生が練習や試合で、自分ばかりに攻めてくるのに僕は不満を持っています」

「昨日の話を聞いていても、こういうことをする人が

キャプテンになる人と言っていましたけど、どこのどんなチームでも、そんな完璧な人いないと思います」

「先生は僕に、何も考えていないと言いますが、僕は考えています。いつもその場で答えることができませんが、じゃあ逆に、それを完璧に答える人はいるのですか？」

「キャプテンしよければ何とかなると思っっているのですか？」

しかし、A君は「もう僕はこの学校に行きたくないです。それが僕の意志です」と書いたこの手紙を翌20日、K顧問に手渡そうとしたが、他の部員から引き留められた。その代わりに渡した「キャプテンとしてすべきこと」と題する書面にこう書かれていた。

「リバウンド、ルーズボールに飛び込む」

「分からないなら、分かったふりをせずに分からないと答える」

「言われた事をチームの皆でできるようにまず自分が手本になる」

自らの「心の叫び」を封印した文章だ。そして自殺前日の22日、練習試合でA君がルーズボールを取りに行かないなどの理由でK顧問はA君の顔などを16回から20回

たたき、「たたかれてやるのは調教されている動物と一緒や」と叱責した。その後、「ギャプテンを続ける」というA君に、K顧問は「怒ったり、たたいたりしても大丈夫か」と確認。翌日未明、A君は自死した。



この報告書が「暴力」と表現した体罰によってA君の顔ははれ、唇が切れた。A君は重大な精神的苦痛を受け、自殺の大きな要因になったと市教委は判断し、2月12日の教育委員会会議でK顧問の懲戒免職を決めた。体罰による懲戒免職は、大阪市の教職員にとって初めてで、全国的にも異例のことだ。

しかし、この報告書は「公務員処分事由」のため、K顧問の行為を「体罰というよりも暴力」ということを認定しただけで、A君が自殺に至る背景要因を丁寧に検証した内容のものとはいえない。K顧問がなぜ長年にわたって体罰を続けたのか。A君を周囲の生徒たちはどのように見ていたのか。学校に対する社会的な評価と部活の実績との関係、スポーツ推薦入学のシステムはどうだったのか。どうすれば体罰の再発を防止できるのか、という視点はここにはない。

桜宮高校（都島区）は大阪湾に流れこむ淀川の河川公園に面し、静かな環境に恵まれたところにある。1980年、大阪府内の公立高校で初めての体育科が併設され、82年には早くも選抜高校野球に初出場している。99年にはスポーツ健康科学科も設置され、最新機器によるトレーニングルーム、年中泳げる温水プール、流水プール、合宿施設などを完備、多くの五輪選手を育ててきた。校訓に「知性・敬愛・活力」を掲げ、「本校では、集団の中で生き生きと生きる自分を見つけることができます。厳しい状況にあっても自分を見失わない強い自分、人にやさしくできる自分を発見することができます」とホームページでうたっている。

そのなかでもバスケットボール部は、インターハイ出場の常連で、K顧問は校長からも一目置かれる存在だった。通常10年以内に転勤する教諭職にもかかわらず、19年間、同校で勤続し、他の教師たちも保護者も本人に意見など言える状態ではなかったという。K顧問を「熱血漢」としてかばう教え子、保護者も少なくない。

K顧問は3月4日のNHKの報道番組に出演し、「私が彼（A君）を死に追いやった」と目に涙を浮かべて語っていた。「彼のレベルアップがチーム全体のレベルアップ

プにつながると考えた。なぜ意識しないのか、なぜ相手を見ないのか、と一言一言尋ねながらたいた。自分自身がわかっていない愚かさ気づいた」

■「情報独占」による「橋下劇場」

A君の死を受けた橋下徹・大阪市長の対応は素早く、「劇」的だった。「体罰ではなく、暴力だ。見過ごすことはできない」。体罰による死という事態はあつてはならないことだし、それを重く受け止めなくてはならないのは人として当然である。年が明け、正月気分がぬけた1月8日、市教委は「A君が体罰をうけて自殺したとみられる」と公表すると、橋下市長はすかさず「この問題は自分が解決する」と表明した。大津市のいじめによる中学生の自殺問題が全国的な注目を集め、教育行政の在り方をめぐって市民の信頼が揺らいでいただけに、橋下市長は自らのリーダーシップを発揮する好機としてとらえたようだ。

A君が自殺した12月23日から公表までの年末年始を含む約2週間、橋下市長はこの事件をめぐる対応策を十分に練り上げたとみられる。市教委は自殺の2日後、「弁護

士5人でつくる外部監察チームと協力して調査する」方針を固め、橋下市長に報告した。橋下市長自身がそれまで「体罰容認」派として発言してきたこともあつて、市教委は「内部調査では市民の信頼を得られない」と判断したという。

自殺から4日後、市教委は部員約50人を対象に体罰に関するアンケートを実施したところ、多くの部員が「A君がたたかれるのを見た」と答え、K顧問も体罰の事実を認めた。それから事件公表までの間、橋下市長と市教委との間にどのような意見の調整がなされてきたかは外からうかがいしれない。外部監察チームから市長に詳細な情報が流れ、橋下市長はその情報をもとにして策を練った。

「大きな流れを作るのは、やはり政治家にしかできない。その流れの中で具体的に中身を詰めていくのが専門家の役割。お正月を挟んだ数週間で、流れはできた。あとはこの流れに従って、在校生、保護者も当事者として学校立て直しに取り組んでもらう」（1月24日橋下市長ツイッター）

一人の人間の死を政治的に利用しようとするれば、死を冒流することにもなりかねない。しかし、安倍政権がス

タートし、支持率を上げていく中で、急速に影が薄くなりつつあった自分の存在感を強烈に示す機会が到来したと橋下市長は見なした。なにかと世間の注目を集める言動を重ねてきただけに、ここぞとばかりに鮮やかな「政治的」手法を駆使し、体罰問題をめぐる「橋下劇場」が繰り広げられていく。

橋下市長自身は、根っからの「体罰容認」派であった。A君の自殺発覚後も、「試合中にビンタをすることはあり得る。僕が受けたビンタは愛情だった」（1月10日）と発言した。が、男子生徒の両親と面会した12日、その態度は一変した。「頭をはたくとか、気合いをいれるために刺激を与えるぐらいは（かまわない）、という思いがあつたが、甘かった。猛省している」。A君の遺書を目にしたことで「体罰否定」派に転じ、体罰をした指導者、それを見逃してきた学校、教育行政を責める側に回った。

「学校の実態を知っているのは僕だけだ。外部監察チームから上がってくる情報を認識すれば、絶対に新入生を受け入れる状態ではない」（1月21日記者団に）

橋下市長はテレビのワイドショーなどに出て「この学校では暴行が常態化していて、それが原因で一人の生徒が自殺している。こんな学校をそのまま継続させるよう

な価値判断はやっちゃいけない」との主張を繰り返した。そして「体育科の募集停止」や「教員の総入れ替え」を打ち出した。

「受験生の今を考えるのか、受験生の未来を考えるのか。受験生の未来を考えると、今の桜宮体育科にそのまま入学させることは絶対に間違い。僕が持っている学校情報でそう判断しました。ここはいったん普通科で受け入れて、学校立て直しに当事者としてかかわってもらふべき」（1月25日同ツイッター）

教師による暴力で生徒が自殺に追い込まれるというのは極めて異常な事態である。そのことを深刻に受け止め、体育科の入試を中止すべきとの意見には一理ある。その死はまた、他の生徒や保護者とまったく無関係ないともいえない。それまでの体罰を容認し、見て見ぬふりした周りの鈍感さについて反省し、議論すべきというのも理解できる。

だがしかし、「新入生を受け入れられる状況じゃない」というのは、厳密にはいえば、どうということなのか。そういう桜宮高校の実態について橋下市長は情報を公表しようとしなかった。「すでにネットではいろいろと流れていますよ」と苦笑まじりに言うだけでは、行政の責任